

顧問の言葉

顧問交代にあたって

白井伸之介

平成から令和になった2019年も、昨年同様自然災害の多い年になりました。特に9月から10月にかけて、関東や東北地方を中心に甚大な被害をもたらした台風15号や台風19号は記憶に新しいところです。これまで台風の被害は西日本が中心になることが多かったようですが、地球温暖化のなせる業か、近年は東日本にも及ぶようです。昨年の弾道でも書きましたが、人間には正常性バイアスという判断の歪みが常に伴うので、「これくらいなら大丈夫だろう」と決して思わず、自身で積極的に情報を取りに行き、早めの対応を取るよう心がけてほしいものです。また行政は「100年に1回の〇〇」など、人間の楽観性バイアス（100分の1の確率なら今回は大丈夫だろうという、楽観的に判断する心理）を誘発する表現ではなく、もう少し具体的なデータに基づいた情報（例えば現在の雨量があと〇分続けば川が決壊する恐れがあるなど）を提供するよう努めてもらいたいものです。ともあれ、犠牲された方々にはお見舞い申し上げるとともに、被災地の一刻も早い復興を望むばかりです。

さて、突然ではありますが、私は2020年3月末をもって、ライフル射撃部の顧問を辞することとしました。定年退職（65歳）である2022年3月末まであと2年と少々あるのですが、早めに交代する理由としては、1. 顧問として適切な先生が阪大にいらっしゃったこと、2. 在任期間が14年と長きにわたったこと、3. それに伴い学生との年齢差が40年以上広がったこと、などがあげられるでしょうか。

以下若干の説明を加えると、1. については、定年が近づくにつれ、どなたか顧問に適切な先生を探すように常々主将に申し続けてきました。顧問の条件としては、一つは大阪大学の常勤教員であること（これは阪大規程）、二つ目には射撃部OBであること（射撃経験は特にリスク管理上必須）の2点をあげて来ましたが、そこで確実なところで、阪大射撃部OBで阪大の常勤教員になっている方を探させたのですが、なかなか見つかりませんでした。困ったなと思っていたところに、伊勢主将から、人間科学部に射撃経験のある早稲田出身の先生がいる、との情報がもたらされました。確かに射撃経験は阪大でなくてもよいわけで、そのあたり自身でも盲点になっていました。そこで伊勢主将を通じて、その先生に顧問就任の折衝をさせ、また私も直接お会いして、2020年度より阪大射撃部顧問に就任することのご快諾を得ました。

新顧問の先生の紹介は、私からは若干とさせていただきますが、名前は野尻英一（のじりえいいち）先生で、人間科学部には2年前に関東の大学から異動されて来ました。人間科学部は100人ほどの教員がいますので、私は人事選考などで名前は存じておりましたが、お話するのは今回が初めてでした。出身の早稲田大学で射撃部に属しておられ、何と、現在もAR、SBを所持され、SBの大会にも参加しているという、射撃部顧問としては申し分ない方に巡り会うことができました。しかも射撃の審判の資格を取得されており、2020年の東京オリンピック(!!)でも審判を務める予定だそうです。このような方に引き継ぐことが出来て、私としては大変嬉しく思います。

交代理由の2と3はある程度共通しますが、いわゆる「長」と言われるような役職は、任が長きにわたるとろくなことはありません。これはどの世界にも共通しますが、長きにわたるがゆえの慢心は必ず生じます。もちろん個人差はありますが、同じことを何度も繰り返すと、どうしても手抜きが生じてしまいます。事実、部員を対象に隔年おきに実施していた、私や射撃部OBが講師になっての安全講習も、2016年に実施してから3年間実施しておらず、我ながらよくないなあと自覚していました。また、年月が経つにつれ、学生との年齢差も広がり、例えばメールのちょっとしたやり取りでもいらつくことが多くなったりもしました。その時は学生と自身の子どもがほぼ

同年齢であることを思うと、自分の子どもはそのような社会性を身につけているか、それができるように教育してきたか、などと自問自答し、そりゃここで怒っても仕方ないなあと、妙に納得したりしていました。ただ部を束ねる主将にはやはりそれは許されないので、自分の子どもと同様、ガミガミと言ってきたように思います。このような思いは、学生との年齢差が開くとともに大きくなっており、そろそろ交代の潮時ではないかと思っておりました。

顧問を担当した2006年から2019年の14年間を振り返ると、射場に顔を出すのは新入生の入部が一段落する6月、試合などが佳境に入る8月か9月、幹部交代のある11月、練習のオフが明ける3月頃のせいぜい年4回程度だったように思います。試合も一度も見に行ったことはありませんし、コンパも最初の頃に1~2回参加したのみだったように思います。その意味では自分は部との係わりが薄く、顧問として不適格だったと思います。とは言え、一つ言い訳をすると、2003年に教授になってから毎年6~7人の研究室の学生や院生を養わねば(?)ならず、それでもう手一杯で、射撃部にまで手が回らなかったというのが正直なところです。なので、これまでの名簿を見ても、思い出のある学生はごく一部です。とは言え、歴代の主将、個人名を出すと、2006年から新郷さん、中川さん、岩前さん、龍田さん、秋田さん、寺本さん、小濱さん、亀井さん、後藤さん、吉岡さん、樋口さん、堀尾さん、山下さん、伊勢さんの面々は今でも顔や所作など鮮明に思い出されます。いずれも幹部交代の際に、主将に連れられて、初めて研究室に来た際は、多くの人は目の焦点が定まっておらず、「こいつ大丈夫かな」と思わざるを得ない人がほとんどでした。もちろんまだ二十歳になるかならないかという年齢なので、それはある程度仕方ないと思います。ただ、その翌年の幹部交代で新主将を連れて来る頃にはいっぴしのリーダー然となっており、役職は人を育てる（もちろんその資質があつてのことでしょうが）とはよく言ったものだと思わざるを得ませんでした。最初の頃の主将は、今は30も半ばに近づき、社会の中堅どころとして活躍しているのではないかと推測します。また弾道などを通して新たに交流が復活できれば嬉しく思います。

この14年間を振り返って、私は安全の研究を専門にしていることもあり、とにかく繰り返し安全、安全と口うるさく伝えていました（それしか言っていなかったかもしれません）。それもあつてか、リスクを伴う他の体育系学内団体が、部の不祥事で何ヶ月も休部になったり、トラブルが生じて、顧問がマスコミの前に出て頭を下げたり、といったことを横目に見ながら、お陰様で何ごともなく任を全うすることができました。これもひとえに射撃部員、それを束ねた主将、OB・OG、阪大学生部の皆様、また部に係わるさまざまな方々のお陰と深く感謝いたします。小トラブルはなかったわけではありませんが、大きな事故や第三者を巻き込むトラブルなどは皆無だったと思います。14年間無事勤め上げても誰もほめてはくれませんが、自分で自分をほめたいと思います。一つ欲を言えば、部の顧問は何年やろうが、大学からは全く評価されず、このあたり改善の余地があるなあと思わざるを得ません。

以上、止めどもないことを書き連ねましたが、阪大ライフル射撃部が今後もますます発展することをお祈りし、筆を置きたいと思います。皆様、長年のお付き合いありがとうございました。また皆様にはこれからも引き続き射撃部へのご支援、ご鞭撻を賜りたく、よろしく願い申し上げます。